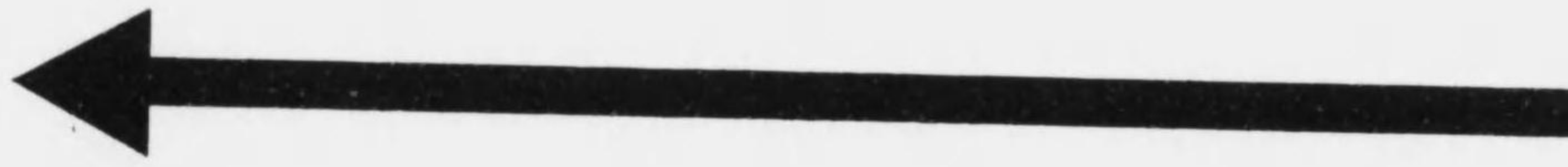


特245

958



始



458

講演集第壹輯

勝田主計先生のお話

精華高等女學校校友會

精245
958



勝田主計先生御揮毫の
額
と
軸
(勝田馨子藏)

序に代へて

勝田馨子

さきに文部大臣として、また大藏大臣として令名あまねき勝田主計先生を
わが、精華の壇上にお迎へ申上げて、親しく教訓を承ることの出来ましたこ
とは、一千餘名の生徒と職員一同の感激、全校の光榮これにすぐるものはご
さいませんでした。

かねてから先生のお話をお伺ひ致したいといふことは一同の者の切なる希
望でございました。この一同の御願ひを代表して、私が先生の御邸にお伺ひ
いたしましたところ、先生は御留守で、また重ねて御願ひに上らうと存じて
居りましたところ、幸ひにも御快諾を得て、公私御多忙の際にも不拘お出で



をいただき、私から先生を御紹介申上げる光榮を許されましたことを深く感謝いたします次第でございます。

殊に先生は、學校經營の細い苦心にまで犀利なる御觀察を遊ばされて、私共に深甚なる御同情を寄せられ、過分なお言葉を下さいましたことはただ恐縮の外ございません。先生のやうな偉い方に、私共の知己（失禮な申分でございますが）を見出し得たよろこばしさ心強さ、私は感激に思はず泪ぐまずには居られなかつたのでございました。

私立學校經營の苦勞は、外間の人の到底想像も出来ないものがございます。私共は殊に、微力のこととて、この仕事のためいく度か、死生の間をくゞつて覺束なくも漸く、今日までやつてまゐりました。しかも思ひのみ餘りありて、實力の其れに及ばぬことばかりでございます。今日となつては、日暮れて、途遠しの感が深うございますが、先生からかうした激勵をいただいては、奮

馬に鞭打つて、また立ち上り、も一層の御奉公をしなくては止まれぬといふ感激がおのづから湧いて参ります。西哲が「生は短く死は永し」と申しましたが、教育事業はこの短き人生に長き死をかけてやりとぐべき聖業の一つと存じます。

ここにおくればせながら先生の御清演の概要を印刷とするに當りまして、先生が慈父の如き温容を以て諄々と説きたまひたる光景を想起せずにはられません。また我國體の精華、教育の要諦、更に新時代の若き婦人に與へられたるくさ／＼の、懇切にして剛勁なる御教訓をこのパンフレットによつて普ねく精華の校友諸子にお願ひすることの出来まことを非常なよろこびとも誇とも思ふのでございます。

ここに先生の御厚情に深く謝意を表すると共に、この内外の非常時に當り、先生のます／＼御健勝にいらせられ、邦家のため御盡力下まことを心から

お祈り申上げる次第でございます。

尙ほ印刷に附する前に、一度先生の御校閲を願ひたいと存じてゐましたが、遂にそれも
いたしませんでした、文責はすべて編輯者にございます、この點は先生にお詫び申上げ
御諒承を願ひたいと存じます。

昭和八年中秋

精華の學園にて

勝田主計先生のお話

於 精華高等女學校

精華に來て

校長先生から、私に本日參つて、皆様に何か一場の話をしてくれぬかといふ
お話でございました。ところが校長先生が私の宅をお訪ね下さいました時に、
丁度私は留守をいたしてをりまして、親しく御目にかゝつて、この學校のこと
について承つておく機會がなかつた。そのみならず、たゞいま校長先生より、
私が文部大臣をやつたといふやうな御紹介もありましたが、これは僅かに一年

位の間やつてをつたに過ぎないので、教育のことなどについては、むしろ素人
 であります。殊に女子教育といふやうな事については、いよく素人なので、
 かやうに令嬢諸子の前で、いろ／＼お話し上げるといふやうな機會は極めて
 少い、それ故、私がこゝに参りまして、何か申し上げるといふことは寧ろ不適
 任であり、その素養がないのです。若しも強ひて私に素養があるといふことを
 申しますならば、かういふことがある。私は娘を五人もつてをります。皆様よ
 りも大きなものをり、既に孫もあるのですが、この娘を五人もつてゐるといふ
 ところに、或は私が令嬢諸子に對して、何か申し上げるといふ資格の一部分が
 あるのではないかといふ位に考へてゐる。そのつもりで、どうかお聴き下さる
 ことを希望するのであります。

私は、この學校に初めて來まして、まづ車をとゞめ、門を入つて見ますと、
 學校の生徒さんが箒をもつて、櫻の落葉かなにかをしきりに掃いておいでにな

るこの一事が、よほど私の感じをひいたのであります。また私が校長先生のお
 部屋はどこであらうかと思つて、ぶら／＼いたしてをりますと、私の何者で
 あるかを知らず、お目にかゝつたことのないあなた方のお友達が、廊下をあち
 らこちら歩いて、私の前を通るときには、みな正しく禮をいたされる。かやう
 な現象といふものは、どこの學校に行つてもさらにあるものではないと、洵に
 氣持よい感じを私に與へたのであります。

一寸赤心惟報國

つゞいて校長先生が、三角になつてゐる小さい應接室にお導きになりまして、
 見ると、昔私の同僚であり、且先輩であつた故後藤新平伯の書かれた軸がかゝ
 つてゐる。それには「一寸赤心惟報國」と、かゝれてある。これ等を見ますと、
 と、もはやこの學校について、委しきことを聞く必要はないのであつて、實に

報國の精神より、校長先生がこの學校を御經營になり、而してその意味によつて、令嬢諸子を教育いたされてゐる。これが直覺的に私には分つた。洵に結構な學校であつて、皆さんが、かやうな學校に於て教育をお受けになつてゐるといふことは、實に幸福ぢやと私は感じたのであります。

かやうな立派な學校であり、また立派な精神に於て皆さんが教育を受けてをられ、朝夕校長先生以下諸先生の薫陶をお受けになつてゐる方に對して、もう何もいふことはない。あの門を私が入つて来て、應接室から、ここへ来るまでに教育の精神が實現されてゐる。これ以上私が、いろ／＼なことを申してゆく必要はないやうにも感ずるのであります。併し折角來ましたから、あまり肩のこらぬことをお話いたして置きたいと思ふのであります。

奈良の史蹟を視て

最初に私は、こゝで皆さんにお話するとすれば、娘を五人もつてゐるといふ理由でお話するといふ事を申し上げますが、その娘の一人が、いま丁度奈良にゐるのであります。既に一年位になりますが、その娘から手紙をよこしまして、奈良にゐる間に、一度どうかお父さんに来て、奈良見物でもしてもらはないかといふことを、しきりにいふて来てをつたのであります。併し、私も大變忙がしいものだから、ついさういふ暇をもたなかつたのであります。するが、今月の初旬、若干の暇を得ましたので、娘の招きに應じて奈良に参りまして、その案内で、方々見物をいたしましたのであります。私は、まづこれからそれを申し上げて見たいと思ふ。

まづ見物の筋は、細かいことはいろ／＼ありますが、第一に、奈良の正倉院を拜観したいといふのが私の希望であつた。もう一つは桃山御陵を一私人として拜みたい。かういふ考へをもつてゐた。私は、何十年に亙つて役人の生活

をいたしましたので明治大帝にも屢々拜謁を賜はり、また、御陵となられましても、役人としては、屢々参拜をいたしてゐるのであります。併しその参拜は、フロック・コート、シルク・ハット、自動車で乗りつけて、さうしてその役人の案内で、一般の人が行かぬ道を歩いて参拜をしてをつたのであります。今度は一私人として、一般の道を行つて拜んで来たいといふ考へで、桃山御陵に参拜をいたしたのであります。それから、なほ一つは、昔の忠臣藤原鎌足公の靈に参拜したいといふ考へを私はもつた。これは歴史で御承知の如く、我が國の重臣として、皇室に忠誠を盡された人で、その餘光によつて、何百年の間、藤原氏が攝政として政治の實權を握り、中には、ずるぶん横暴或は非道な人間も出てをりますが、その先祖である鎌足公は、我が皇國のために非常に貢献したところの臣下——臣下の元祖といつてもよろしい——その靈を祀るところに参拜したいといふ考へをもつたのです。それは、諸子もみな御承知であらうが、

多武峰たふのみね（大和）の談山神社といふのに祀つてある。多武峰は、奈良から電車で四、五十分行つて、それから先五十一町位ある。そこは山の中で、電車がなから、自動車で行く、皆さんの中には、歌を知つてをられる方があつたでせうが、昔の歌の中に「花の中宿」といふことがあります。それは、丁度奈良と吉野との真中ころであるから、さういつたのである。そこにある神社であります。元はお寺であつたが、明治維新になつて別格官幣社になつたのです。

勅封の御物と最古の建築

それで先づ第一に、正倉院しょうそういんのことを少しお話しして見たい。この正倉院は、普通の人は行けない。私などは、幸ひ役人であつたから、いつでも行けたのであります。が、今年初めて行つたといふわけで、以前は、その希望をもつてをりましたけれども、よう行かなかつたのであります。これは、或は先生から既に

話をお聴きになつてゐるかも知れませぬが、若しさうであれば二度お聴きになることになり、大變によく分ることですから、私は申して見たい。

正倉院は、どこにあるかといふと、奈良の市中にあるのです、奈良の市中に東大寺といふお寺があります。これは大佛さんのあるところだから、皆さんも大抵御覧になつてゐると思ふ。東大寺は、今日では昔の形跡がなくなつてゐるが、とにかく奈良の大佛さんといへば、誰も知らぬものはない。正倉院は、この東大寺の境内にある。こゝでちよつと皆さんに申し上げて置かなければならないことは、この東大寺といふのは、御承知の如く、一千二百年ほど前に 聖武天皇(四十五代^{一三八四}_{一四〇九})が御建てになつた寺である。今はその當時のまゝの建物は無い。こゝは屢々焼かれたりして、建物は新しくなつてゐる——新しいといつてもかなり古いが——こゝでもう一つお話しして置かねばならないことは、この寺を、今の普通のお寺のやうな考へで見てもはいかぬ 聖武天皇が、何故か

やうなお寺を御建てになつたか。お互ひにこの寺に詣でて、南無阿彌陀佛、或は南無妙法蓮華經と唱へて、たゞ拜むだけの寺ではない。これは、一つは國民の知識を啓發するため、今でいつたら大學校の目的、いま一つは、國家の盛運を御祈りになるため、即ち天子様が、我帝國の益々隆盛になることを、御祈りになるため、斯ういふ目的で、このお寺は建てられたわけなのであります。一つは學校、一つは國家の隆盛を、天子御自ら御祈りになるところの殿堂、かういふことで、このお寺は建てられた。また 聖武天皇の御勅によつて、國々に國分寺といふものができてゐる。つまり分家です。即ち國々にも教育の機關を置き、一面にはその場所、例へば河内の國なら河内の國、大和の國なら大和の國の益々隆盛になることを祈るために、國分寺といふものを御建てになつた。これがまた面白いことで、男だけでなく、坊さんのお寺を御建てになると同時に、尼さんのお寺をも建てられた。今でいへば女學校です。それを國分尼寺といつ

てをつた。かういふ御趣意から、聖天子 聖武天皇は、甞に佛法に歸依なさつて、佛様を拜んでおいでになるといふやうなことばかりではなく、まことに高遠な御理想のもとに御建てになつた、しかもこの東大寺が總本山だから、當時の規模といふものは非常なものであつた。今日は、その僅かなものが遺つてゐるといふやうなことであります。正倉院は、この大佛さんの裏側にあります。一體この正倉院といふのは、昔は大きなお寺には皆あつた——つまり今のお寺の意味ぢやないが、とにかくお寺といひます——そのお寺の寶物或は御經類、さういふものを貯へ、收めて置くところの場所、これを正倉院といつてをつた。だから正倉院といふのは、東大寺だけではなく、方々の大きなお寺には大概あつた。ところが、それが皆なくなつてしまひ、特に東大寺は 聖武天皇が、たゞ今申し上げましたやうな御趣意で御建てになつたものであるから、こゝにあるのが一番大きくて、さうして尊き御倉になつてをつて、これだけが當時のま

ゝで遺つてゐる。一千二百年前のものが、そのまゝ遺つてをります。かやうな尊い歴史のある正倉院のことですから、これからもう少しその内容を申し上げたい。これは只の漫遊談ぢやない、大分意味がありますからよく聽いてをつて下さい。

この建物はどういふものかといふと、極めて簡素な建物です。つまり檜の丸太の白いところを捨て、中の赤身あかみだけにしたものを、そのまゝ丸太で組立てた建物なのであります。今日あるのは、昔のと少しちがふといふ話であります。昔は三つ倉になつてをつたものを後に一緒にくつ附けたといふ話であります。とにかく倉がかうあるとすると(圖解)、私は間數けんすうをとらぬから分りませぬが、間口が十間位もありますか、奥行が六間位、これ位の大きさのものであります。正面に口が三つ附いてゐる。三戸前になつてゐるわけ。南の方角にあるのを南倉、北の方角にあるのを北倉ほくさうと稱へ、真中にあるのを中倉と稱へてをります。

この倉の下は丸太の柱になつて、八尺位の高さがありませう。空気が抜きになつて風通しがよくなつてゐる。入口といふのは、正面の階段を上がつて、戸前が三つあるが、それだけしかない。而してこの倉の中は二階になつてをります。かういふ簡単な構造でありますが、簡単な木造のかういふものが、今日でも、殆ど一千二百年前のまゝ遺つてをります。檜などは銅のやうな色をしてをつて、さわつて見てもまるで金のやうなものになつてゐる。

建物はさういふものであるが、然らば中にはどういふものが入つゐるかと思しますると、いろ／＼なものが入つてゐる。併し、これを概していへば 聖武天皇——その以前の天子様か御使ひになつたものもあるかも知れませぬが——とにかく天子様の御手廻りのものを、すつかりこゝへ入れて御いでのになる。それから、いま申した東大寺に諸國から献上したやうなもので、珍らしいものは皆この中に收められてゐる。それで、少くとも一千二百年以後のものはない。皆

それより以前のものであつて、非常に古いものが、この中に收められてゐる。

こゝで不思議なことは、さやうな建物であつて、さうしてすぐそれから五十年か、六十間行くと大佛さんの建物があり、この東大寺の方は皆さんも歴史で御承知の通りに、何度も戦で焼かれてゐる。治承の亂、即ち源平の戦或はその後戦國時代になつて、屢焼かれた。建物を焼くどころぢやない。大佛さんの首や手をもいで—— 聖武天皇が、各國から銅を集め、通貨を集めて鑄造せられたといふことではありますが——それを今度は通貨に還元して戦をしたわけであつて、さういふひどいことになつてをつても、この正倉院だけは兵燹に罹らずに今日まで来たわけ、一千二百年前のかういふ木造の建物が、その當時のまゝ遺つて來てゐるといふことは、洵に不思議なことでもあります。而してこの中にあるものは、これは勅封といつて、年に一度、丁度いま時分に、或階級のものに限つて拜觀を許されるのでありますが、この中にあるものは、洵によく保

存せられてをりまして、普通千年とか、千何百年とか経たものは、ぼろ／＼になつて、わけの分らぬやうになるものでありますが、相當立派に、ちやんと現存してをります。これは實に不思議な位であります。

その中にあるものの細かいことを私は一々記憶してをらぬ。僅かに二時間ばかり、而しかもかういふ道には素人であり、その素人の拜觀でありますから、専門家からいつたらちがふことがあるかも知れませぬが、この中にある御物が、品目にすると、まづ五百二十位、併し、同じ品が澤山ある。例へば鏡にしても、何十面もある。さういふことから品の點數にすると、大方七、八千位はあるだらうと私は思ふ。然らばどういふものがあるかといふと、大體天子様の御手廻品のやうなもの、硯もあれば筆もあり、文箱もある。それから武器、或は舞樂に使ふ面、鏡その他の種々なる銅器、或は樂器等あらゆるものがある。而してこれ等のものは、どこで出来たものかといふことになりますると、私にはよく

分りませぬが、確かに支那から傳來したものが大分あるやうである。玄人の話を聽きますと、漢或は隋のものまでも、この中にあるといふことであります。それと、その當時の我々の祖先のつくつたところの美術的なものが、みんなここに現存してゐるわけなのです。

丁度 聖武天皇の御代、今より一千二百年前と申しますると、これは、支那でいふと唐です。聖武天皇の御時が、支那では有名な楊貴妃などの出た唐の玄宗皇帝の時代であつたのです。一體支那文明の爛熟したといふことは唐時代である。その唐の中でも、文化の最高潮に達した玄宗皇帝の時代が、我が國では聖武天皇様の御代である。それで、この唐或はその前の隋、漢あたりの爛熟したところの文化の産物の一部が、この倉の中に御物として入つてゐる。同時に、こゝ等の感化を受けて、我々國民の祖先が心血を注いだところの美術——美術といつては少し語弊があるかも知れませぬが、今日では、まづ美術品と申して

置いてよろしい——さういふものの大多数が、今日現にこゝに遺つてゐる。而して其の間にいくら兵亂があつても、これには誰も手をつけない。兵火はつい近くまで來た。それでも、この聖堂には及ばなかつたのであります。徳川時代になつて、徳川氏が、政權を握るに及んで、新井白石に命じて、こゝの目錄を編纂させたといふことがある。新井白石といふのは、皆さんも、先生から聴いてをられるでせうが、徳川時代の立派な學者です。正倉院の御物を徳川氏が、或は自分のものにしようといふ風に考へたのではないかといふやうな説もあるのであります。併し、あの徳川氏の權力をもつてしても、これには手を觸れることができなかった。これは勅封といつて、天子様御自ら封をなさつてをられますので、誰もいぢることができず、建物それ自身、内容そのもの、殆どみなその當時の形に於て、ちゃんと今日まで遺つてゐる。

これは誠に珍しいことで、私共が玄人から聴いた所では、例へばイギリス、フランス或はドイツといふやうな文明先進國では、實に世界の珍しいものを集めて、イギリスの博物館などには、いろ／＼なものがあるが、そこには、みな土地の中から掘出したとか、何とかいふやうなもの古いものはあるが、空氣の中にあつて、一千二百年以上の古いものがちゃんと現存してゐるといふものは日本にしかない。これは日本の誇りで、誰が何といつても、これほどの寶といふものは世界にない。これは日本國民として知つて置かなければならぬことと思ふ。

私が、この正倉院を拜觀して感じました事柄は、聖武天皇の當時、即ち天平年間（一四〇八）に於ける日本の文化といふものが、いかに發達してをつたかといふことでもあります。これにまづ驚いたのである。第二には、かやうに古い文明、文化が、また同時に支那の古い文明、文化と共に、かう永く、一千二百年も、木造の木をたゞ結合させた建物の中に遺つてゐるといふやうなことは、殆ど奇蹟

的であり、驚嘆に餘りあるといふことを痛感したのであります。またかやうなことが、結局我國の國體に原因する、即ち萬世一系の天子様が、二千何百年もお續きになつて、我々に幸福な生治を御授け下さるといふそのこと、もうこれで分つてゐる。私共は今まで日本の歴史を讀み、或は「君が代」を歌つて、日本の國體・皇室の有難きこと等について、平生いみじく感じて居ることでありませんが、この正倉院を拜觀して、また益々日本といふ國は有難い、殊にこの國體といふものは、いかにも尊貴なものであるといふことを、一層痛切に感じたのであります、それで、たゞ遺憾なことは、さういふ世界的の至寶の御物でありますから、一般にお見せになるわけには行かない。私は、日本の國體について彼はいふものがあつたならば、正倉院を拜觀させれば、たちどころに分ると思ふ位であるが、今申したやうに、至寶の御物であるから容易にお見せにはならぬ、これはまた無理もない、私共の聞いてゐるところでは年々戸を開け

て、僅かに二週間位お見せになるのであります、それでも中のものが變色する。その位のものでありますから、これをこのまゝ國民全體にお見せになるといふわけにはゆきませぬが、私共の承るところによれば、何かこの中の御物の精巧な模型をつくつて、それを一般國民に見せてやりたいといふやうな御考へが、畏き違にあるといふことであります。併しこれも御經費の都合もありませうから、さう急には運びますまいが、將來は、御物そのものを拜觀することは容易にできなくとも、一般國民がこれを拜觀して、感涙にむせぶやうな時機が必ず來るであらうと私は思ふのであります。

次にもう一つ申して置きますことは、これは諸子も御覽になつてゐるだらう。法隆寺といふ寺が、奈良から五里か六里離れたところにあります。これがまた日本國民としては、どうしても見なければならぬものである。この法隆寺は、普通ならば昔焼けてしまつてをつた。けれども、奈良から五、六里離れて

ゐるといふことで、今日迄完全に遺つてゐる。このお寺は誰が行つても自由に見られるのであります。木造の建築物としては、日本中にこれほど古いものはない。また恐らくは世界にもない。一千三百二十五年前といふおそろしく古いもの、これほど昔のものが、今ちやんとそのまゝ遺つてゐます。

この場合に——後にまた私は、佛像のところでもちよつと申しますが——私は専門家ぢやないから、専門家のやうなことはないへぬのでありますが、たゞ専門家の使ふ言葉にかういふのがある。(よく覚えておいて下さい)。飛鳥時代、白鳳時代、天平時代——と古い佛像、古い建物などについて話をする時に、よくかういふことをいひます。これについて委しいことはいろ／＼あるのですが、大體かう考へてをつたらよい。

日 本 支 那

飛鳥時代——推古天皇……隋——煬帝

白鳳時代——天武天皇……唐——高宗

天平時代——聖武天皇……唐——玄宗

これは大體ですよ。飛鳥時代は 推古天皇の御代で、支那では隋の煬帝の頃。達磨大師が出たあの時分。白鳳時代といふのは 天武天皇の御代、これが唐の極く初期、高宗の時分。天平時代は 聖武天皇の御代で、唐の玄宗の時分であります。これはよく出て來ることありますから、ちよつと説明して置きます。年代は、飛鳥時代が一千三百四十五年位昔、白鳳時代が一千二百五十八年位昔、天平時代は、先程申しました如く、一千二百年位昔、かういふのです。つまり法隆寺は、専門家からいふと、飛鳥式と稱へて、飛鳥代の建物であります。この時代た於ては、建築などの上に於て、まだ唐のものが日本に入つて來てをらず、朝鮮——三韓のものが日本に入つて來てをつたので、それを日本人の頭で咀嚼してつくつたものが法隆寺であるから、後世にできた唐風の寺などとはち

がつてゐる。

この法隆寺が兵燹にも罹らず、火災にも罹らず、地震に遭つても倒れずに、今日ちやんと遺つてゐる。これは、日本國民として、どれほど我々の先祖が、文化の上に於て偉かつたかといふことを知るのには、どうしても見て置かなければならぬ。私は何度も行きました。何度行つて見ても、いかにもよい氣持がします。

我國體の精華

さて、これが畢竟どういふことであるかといふと、この國體、即ち萬世一系の天子様が御親臨になつてゐる、その御蔭でかういふものができ、かういふものが遺つてゐる。これに聯想していろ／＼考へて見ますると、實に有難い感じが起る。歴史などを、たゞ見ただけでは、そんなことがあつたかなと思ふ位で

ありますが、實際に、前の正倉院、或はこの法隆寺を拜觀いたして見ると、誠に國體の有難いことがよく分る。私も六十にして初めて、眞實にこの『國體の精華』とは何であるかといふことが分つた。この學校は精華女學校と稱へられてゐる。國體の精華といふことは、教育勅語の中にもありますが、即ちかういふところを見れば、精華とは何であるかといふことが、直覺的に頭に入つて來る。近頃動もすれば、西洋の極く表面の理想にかぶれ、日本の國體とか、皇室とかいふことに對して、稀には云爲するやうなものが出ますが、若し、これ等の史蹟をよく參觀すれば、そんなものが出やうわけがない。私は、深くさう感じて來たのであります。この學校でも、前申した「一寸赤心惟報國」といふ精神をもつて御經營になつてゐるといふことは、まさに奈良に行けば、すつかりそれが分る。精華女學校『精華』といふのは何かと、諸子が人から聞かれたならば、それは奈良に行つて、正倉院を拜觀なさい。法隆寺を御覽なさい。そ

の答で足りるのであります。

二四

佛像の精隨

それから、奈良を見物しますると、どうしても佛様を見せられる。これがまた今申しましたやうに、非常に古いもの。飛鳥時代の佛様、白鳳時代の佛様、天平時代の佛様、いろいろ種類がある。普通にあるのは、極く後世のもので、或は藤原時代とか、鎌倉時代といふやうなものでありますが、藤原時代になると、佛様がまるぼちやになつてをつたりする。大變かはつてゐる。ところが飛鳥時代の千三百年以前の佛様は、これは主に何々観音、何々菩薩、かういふものです。この飛鳥時代のものを見ますると、いかにも威嚴があり、神韻がある。白鳳時代のものになると、威嚴、神韻の上に、優雅なところが加はつて来る。天平時代のものになると、優雅といふ方が、ずつと色が濃くなつて来てゐる。

威嚴、神韻といふ方が、優雅に押されるやうになつてゐる。併しいづれにしても天平以前の佛像といふものは、それは大したもの、よくもあの時分の我々の先祖が、あれだけのものをつくつたと感ぜられる位であります。

ところが、佛像の菩薩とか、観音とかいふものは、古い時代からのものをすつと見てゐると、みな女です。婦人の形であるのです。それで大概観音様が真中に居られると、その脇には四天王といふものがある。これは皆男です。男も男、節肉の隆々として、眼の大きな仁王様のやうなもの、それがかう肩を張つて控へてゐる。その真中に、菩薩様、観音様が、女の體格、女の顔をして、ちやんと立つておいでになる。たゞ時代によつて多少ちがふだけの話であります。日本でも一番の大神様 天照大御神は女神に在しますことは皆さんの御承知の通りです。一體神様といふものを、人間が、靜かに眼を瞑つて、かういふものであらうかといろ／＼に想像し、眞の理想に到つたときに、これを畫に描き、

二五

或は肖像に彫刻するといふことになる、女人となり、女像となつてしまふ。これで婦人といふものが、いかに偉いものであるかといふことが分る。

眞・善・美

昔からよくいふことでありまして、皆さんは先生からお聴きになつてをりませうが、眞・善・美といふことをいふ。これは同じものだといふ。こゝに三角のガラスがあるとして、こゝから見れば眞であり、こゝから見れば善であり、こゝから見れば美であつて、観方は違ふが結局同じ一つのものであるといふ、これです。要するに、この眞・善といふものの到るところは、やはり美になる。美といふものになると、これは女になつて来る。だから女といふものが、神様であり、佛様であると、かういふやうなことになつて来るわけなのです。或は封建制度等の關係から、女性は男性より一段劣つたものであるかの如くに考へら

れたこともありますが、これは非常なまちがいであります。

また今まで西洋といひ、或は東洋といひ、いづれに於ても女性といふものを虐げてをらぬ。神様、或は佛様として拜んでゐる。大の男が、女の顔をした、女の手足をした、女のやうな羅の着物をきた佛様や神様を拜んで、どうか私の心願の叶ひまするやうにといつてゐる。決して虐げてをらぬ。それでありますから、婦人方は決して悲觀したものでない。女であるから第二線に立つべきものであるといふやうな觀念は、これをまづ捨てなければならぬ。寧ろ強い自信をもつてやらなければなりません。

婦人の眞の美

しかしこゝに美といふことについて一つ考へなければならぬ。女の色が白くて、顔がきれいで、眼もぱつちりして、鼻節も通り、口もとも締り、きらびや

かな着物を着てゐるもの、これが美かといふと、さういふものは美ぢやない。丁度佛様を見るとよく分る。佛様、神様になつてゐらるる顔といふものは、なるほどよく整つてゐる。五體も整つてゐる。併しその中から走り出るところの後光、これがやはり必要なのであります。先程申しましたやうな古い佛様などになると、中から後光がさしてゐる。即ち眞の後光、善の後光がさしてゐる。それで初めて全體の美を成してゐるわけであります。それがないと——私は藝術家ぢやないからよく分らぬが——前に申した藤原時代の佛像のやうなものになる、藤原時代の佛像は、見たところはまるぼちやで、いかにもきれいであり水々したものであります。併しその中から、眞・善の後光がさしてゐない即ちほんとうの美があらはれてゐない。要するに、さういふものはほんとうの美ぢやない。だから私共のやうな年とつたものから見ると、皆さんの姿もみんな同じに見える。それはどういふことであるかといふと、皆さんの腹の中にある、

その美が、みな發露されてゐる。即ち校長先生を初め、諸先生の御薰陶によつて、その美がみんな發露されてゐるから、どなたも皆美人に見える。誰だけが美人といふことはない。そこに到つて初めて美といふものがある。これを取りまちがへると大變なことになる。平たい言葉でいつて、この頃はやる虚榮とでもいふやうなことになる。これは大變なまちがひになる。たゞ表の美ばかりを飾らうとすると、虚榮になり、その結果は、實に憂慮に堪へないことになつて来る。例へば、この頃の活動俳優が、どういふ風に髪を分けてゐるか、どんな風にちぢらしてゐるか、どんな風に髪を切つてゐるか、かういふことのみ心配をし、眞似をしやうとする。これでは美といふものをすつり失つて仕舞ふわけであります。

私の知つてゐる人にある老人が、これは講演をして歩く人でありませんが、北海道の或村から、その人々に、かういふ注文をして來た。どうも私

の村の娘達が、みな髪を切つて、河童かわこにして困ります。お母共おかあは、そんな見苦しいことは止めてくれといふのですが、娘はなか／＼止めない。どうか先生、来て話をして下さらぬかといふのです。それで、この老人はその村に行つて、村の者を集めて講演をした。その要領はかうである、一體あの河童といふものは、あれは陸にゐる動物ぢやない。水の中に住んでゐるものである。それがこの頃陸に上がつて来たといふのは、どういふわけか。これは歐洲大戦の時分に、女が看護婦その他のいろ／＼な役を勤めて、塹壕生活をした。地面を掘つて、その中で彈丸を避けて生活をしてゐる。湯に入ることもできぬ。頭に香水をつけることもできぬ。虱がわく。それでしやうがないから髪を切つた。惜しい髪を切つたのであります。その風習がアメリカの社會に入つて大流行を成した。あの虱よけの河童の眞似などをあなた達がするといふことは、實に怪しからぬぢやないかと、かういふやうな話をした。それからこの人はもう一つ話しました。

この老人は宮内省に關係のある人でありませんが、上つ方うへがたの御前に伺候する時などは日本の婦人として一番丁寧なのは御垂髪すべらかしといふやうな髪である。髪を切つてゐると、この髪に結ふことができぬから、上つ方に拜謁することもできない。河童では光榮ある場所に出て行くわけに行かぬ。日本國民として實に不都合ぢやないかといふやうに、だん／＼冗談まじりに説いて行つたところ、それから後なるほど河童は悪いといふので、髪を伸ばし出したといふやうな話がありました。流行を追ふ結果、河童といふやうなことになる、これは美ぢやなくなる。たゞ外にあらはれた虚榮の美といふことだけに専念すると、とんだことになる。着物でもさうです。立派な着物を着るといふことにはかり専念して誰それ、どういふやうな縞柄かひの着物を着てをつた、どういふやうな縷ぬいのある帯をしめてをつたとかいふやうなことで、むやみにこれを模倣すると、遂には婦人の美といふものは皆失ふことになります。

よく昔の話にあります、昔京都の大金持や身分ある人達の奥さんが寄集まつて會をやつた。さうすると、みな何百兩といふやうな金をかけて立派な着物をつくり、立派な帯をつくつて競争して出て行く。ところが或女の方が、やはりさういふ意味で、あの有名な畫工尾形光琳くわいりんといふ——この人は日本で名高いのみならず、フランスの畫などは、この人の畫風が非常に入つてゐるといふ位有名な畫工である——この人に相談をした。皆に負けない位の仕度をして行かなければならぬが、先生一つやつてくれませんか、さうすると光琳は、委細承知したといつて、ちやんと着物から帯まで揃へて持つて來た。何をもつて來たかと思つて見ると、黒木綿の紋附だ。帯は何か、白羽二重か何かで、牡丹の花か何かがちよつと描いてあるだけのもの。それを持つて來たのでびつくりした。もつと何か、皆に負けない華かなものをもつて來るかと思つたところが、かやうにいかにも簡素なものである、併しその婦人は中々偉い人であつたから、

ちやんとそれを着て、集會の席に出て行つた。出て見ると、ほかのものが何百兩かけたといふでこ／＼した衣裳よりも、この黒木綿の紋附に白羽二重にちよつと何か描いた帯をしめて、簡單でしかもすつきりした、その清楚な姿が、却つて一番目立ち、みながその前に降参したといふことである。徒らに金をかけて、むやみに着飾つてをつたところで、美といふものは出て來ない。やはり心の美と、外面にあらはれた美とが、ちやんと一致しないと、ほんとうの美といふものは生れて來ないと、私は思ふのであります。これは私が奈良に行つて、方々のお寺で、或は飛鳥式、或は天平式といふやうな佛像を親しく拜んで見ると、つく／＼さういふやうな感に打たれる。またこれを實際について考へて見ても、どうもさうである。今日あたり皆さんの顔を見ると、同じやうに見える。この中の誰が美人といふわけがなく、みな美人に見える。それは、立派な教育を受けて居られるため、皆さんに後光がさしてゐる結果である。どんな着物を

着てをられても、どんな風貌をしてをられても、みな美に見える。かうならなければ私はいかぬと思ふ。この美といふものは、これを一面から見れば、善であり、真である、これがほんとうの人の姿であります。

申すまでもなく、國家といふものは人類から成つてゐる。この人類の本は女子にある。要するに子を生み子を育てる役は女子にある。諸子が、常に諸先生から指導を受けられてゐる通りなのである。これはまことに重大な責任なのである。實際家庭について見ても、私共は娘を五人もつてゐると申しましたが、實は自分が、娘に何をしてやつたこともない。みな妻がやつてくれる。妻が生んで、さうして育て、くれる。この育てがよく行くか、行かぬかで、その子供は善くなるか、悪くなるかといふことになるのです。大概男とこふものは、さう家にはをらぬ。外で働いてゐる。これは皆さんも御承知の通りである。それで、どうしても國がほんとうに強くなり、富んで行き、文化が盛んになるとい

ふやうな事柄の根源は、みな女子にある。これは、先生方から皆さんに、毎日御教訓になつてゐることだらうと思ひますが、これを考へて行かなければならぬ。自分は佛様である。而してこれを世俗的な言葉でいへば、この國家社會といふものを立派にして行く、富まして行く、これを隆盛にして行くといふその本は自分ちやと、斯う考へて學問をし、修養をし、仕事をして行く。この重大なる責任をよく理解してゆくことが大切です。婦人がたゞ、外觀の美に流れて、頭の髪を心配したり、着物の色を心配したり、そんなことばかりやつてゐると、社會が駄目になり、國家も亦衰へてしまふ。國が衰へるといふことは、即ち我が萬世一系の天子様を戴いてゐるこの立派な日本國が衰へてしまふといふことになるので、さうなつては、何としても我々の先祖に對して濟まぬことである、かう考へて奮發しなければならぬと思ふのであります。

女が、男と同等であり、或意味に於ては男より偉いものであり、又神様と同

じものである。また女は美の極であり、眞善美の結晶であると、かういふやうな偉い理想をもつてゐることは、大變に結構なことでありますが、併し、それと同時に、やはり女は女らしくやつて行かなければならぬ。私はさう思ふ。近頃のいはゆるモダン・ガールとでもいふやうな、あゝいふ跳ねずつた上滑りのことに傾向いてはいかぬ。さうかといつて、私の女らしくといふのは、昔の小説などにあるやうに、ちよつと動いても直ぐ癢が起るなどいふ、あれでも困る。女らしくといふことも、社會の事情に應じて、改善をして行かなければならぬのであります。

改良と進歩

餘談が多いが、この間も宇治に行つた。平等院のあるので有名なところ、あそこで茶をつくつてゐます。宇治茶といへば、これも有名なものである。去年

は、私は静岡の茶業を見に行つた。静岡の茶業は御維新後に、職を失つた徳川の武士に生業を授けるために起つたものであるが、宇治の茶は、七百何年前に、榮西禪師が支那から茶の種を持つて歸つて蒔いたに始まるといふことで、非常に古い。古いけれども、今日少しも進歩して居らない。行つて見ても、茶畑などは誠に衰れなものになつてゐる。これに反し静岡の茶は、新しいけれども、えらい勢ひである。見渡す限り茶畑で、それがいかにもよくできてゐる。静岡の茶は、今日これを日本内地に供給するのみならず、外國にも何百何萬圓といつて輸出するやうになつてゐる。何故そこにさういふ變りが出来たかといひますると、その理由はいろいろあるが、宇治では、昔のまゝに、女があねさんかぶりか何かで、赤いたすきをかけて、茶摘歌をうたひながら、一本づゝ葉をむしつてゐる、ところが静岡へ行くときさうではない、やはりその茶摘姿は同じであるが、手でむしる代りに鋏をつかふ。その鋏には袋が附いてゐて、摘んだ茶

は袋の中へ自然に入るやうになつてゐる、つまりそれで茶を刈てゐる、だから非常に早い。宇治のやうに、一本づゝ手でむしつて行くのとは比較にならぬ。だから茶を摘みながら女のうたふ歌がちがふ、宇治のは、昔からあるやうに「茶摘歌」であるが、静岡の方は「茶きり歌」であります。私も茶きり歌をやつて見たが、なか／＼馴れぬと、鉄をかうもつて使ひながら歌などはうたへぬ。併しこの女は馴れてゐるので、鉄をかうやりながら、茶きり歌をうたつてゐる。さういふやうに、やはり時代によつて變つて來なければならぬ、この茶きりに變つて、どうかといふと、大變に生産費が安くなつて、よそへ茶が安く出て行く、かういふことである。そのやうな變り方といふものは非常によい。時勢に従つてさうやつて行かなければならぬ。また宇治の茶は、これを手で揉むが、静岡の茶は、機械で揉む。だから宇治の茶と静岡の茶とを比較すると、静岡の方は丁度いまの紅茶のやうに、ひねり方が毛蟲のやうになつてゐるのが、宇治

の方は手で揉むから、びんとなつてゐる。併して外國へ出す茶は、綠茶でも、静岡の茶でなければならぬ。ロシアへ去年、一昨年あたり、六百萬圓位の綠茶が出ましたが、みな静岡の茶で、宇治の茶ではいけないといふことです。

さういふ風に、時代によつて改良して行かなければならぬが、その改良が、つまり國家社會の利益になり、富を増進して行くとかいふ理由の下に、それに向けて行くのならば結構なことであります。併し反對に無意味なるのみならず、むしろ社會の害になり、國家をも衰微さすやうな變り方をして行くのであれば——とかく人間は、さういふことに流れて行く傾向があるのでありますから——大變なことで、これはよほど考へなければならぬことであると思ふ。それ故に女らしい教育をし、また教育を受けてもらひたい。この學校の校長先生などは、その趣意でやつてをられる。これは洵に結構なことであり、私共の理想に適合することであると思ひます。

なほ一言、これは方々の學校でお話することでありませんが、どううも日本の缺點は、國の富が貧弱であるといふことなのです。これは、別に委しい説明を加へなくても、大概お分りになつてゐると思ふが、どういふことでさうなるかといふと、經濟の思想といふものがない。私は、この經濟の思想を學校に吹込むことが必常に必要だと思ふ。殊に女子教育に經濟思想を吹込むといふことは、極めて必要なことであると考へる。例へば、こゝなどではさういふことはないでせうが、私の娘などには時々あつたことです、學校で料理をやる。まづどんな料理をつくつて來るかといふと、材料がなか／＼かゝる。さうして何だか西洋料理のこねくつたやうなものを、まあお父さんがあがつて御覽なさいといふけれども、それだけはまつびら御免だと私はいひます、食へる氣はしない。大根

の料理でも、豆腐の料理でも、材料を安くして、おいしいものをつくる方法はいろ／＼あらうが、さういふことを考へずして、原料や何かはお構ひなしに、金がいくらかゝるのか分らない、さういふ料理を學校で教へる。それから裁縫でもさうです。うちで洗濯したものか何かをもつて行つて、教へてもらつたらよからうが、どうもさうはいかぬ。やはり新しいものを持つて行かなければならぬ。實は要らぬのだけれども材料として買つてやる。それを持つて行つて、玩具みたいなものをつくつて來る。さういふやうなことで、どうも經濟といふことを考へない。

曾て私は、或女子高等師範學校へ行つたことがある。當時私は文部大臣をしてをつた。さうすると、私が文部大臣ちやといふので、立派なカステラのお菓子をつくつて出した。これが學生のつくつたお菓子でございますといふ。いくらか／＼かといふと、答へが出來ない。退いて、十分位相談をして、さうし

ていくら／＼かゝりましたと、かういふ話である。又この學校では洗濯場が立派に出来てをりますといふ。行つて見ると、水道の栓がみな抜いてあつて、水が落ちてゐる。石鹼がうんとある。手が荒れてはいかぬといふので、何か手につける薬などがずつと置いてある。なるほど立派な洗濯場ではあるが、こんな風に、水道の栓は抜き放し、石鹼を勝手放題に使つて、その上荒止薬かなにかを使ふといふやうなことならば、浴衣かなにかを洗濯する場合は、新しく買った方が利益ではないか。要するに、さういふやり方をしてゐる。もう一つ實驗談がある。東京の附近で補習學校を視察したことがあります。補習學校といふものは、比較的實地に近い教へ方をしてゐる。それを見に行つたことがあります。行つて見ると、女學生などが澤山居つたが、そこら邊の草を引抜いたり、いろ／＼やつてゐる。それから奥の方に行くと、女學生が跣足で花をつくつてゐる。つくつた花は、これを賣るのだといつてゐる。どうも足を見ると、さう

跣足になつたやうな足ぢやない。その時だけ跣足になつたやうな足である。それから何か、西洋の草花を鉢に澤山つくつてゐる。この鉢はいくらするか。これはいくらで賣れるのかと、問ふと誰も知らない。かやうに經費のことは知らずに形だけそんなことをしてゐる。文部大臣が来るからといつて、今まで跣足などになつたこともないものが、急に跣足などになつて草花をいぢつて、實地練習だといひ、これを賣つて利益があれば、學校の利益になるといふが、その實は損益の計算も知つてゐない、つくりごとなのである。模範的の補習學校といふやうなところですから、さういふことをやつてゐる。洵に困つたものだ、要するに經濟を知らぬ。經濟の頭といふものがまるでない、さういふ教育を受けて學校を卒業し、一家の主婦となつたとしたらこれはたりませぬ。大概その時分に、家庭でも持たうといふ男は、月收七、八十圓位なもの、大學を卒業したものでその位である。そのお嫁さんが、前に申したやうな學校で教はつた西

洋料理をつくつたり何かして、経費をお構ひなしにやつては、家などもてるわけのものではない。どうも経済の思想といふものが非常に乏しい。これをよく吹込まなければならぬ。即ち家庭経済といふものが、これがほんとうにしつくりゆくならば、つまり國家の経済といふものもしつかりしてゆく。日本は、兵力は強い、滿蒙の野に僅かの兵隊をもつて行くと、支那の何十萬の兵隊といふものはみな逃げる。かういふ状況であるが、省みて、内の経済を見ると、みな汲々して困つてゐる。これでは世界の強國などといつて安心して居るわけには行かぬ。その本をつくるものは、何も大藏省がつくるのぢやない。政府がつくるのぢやない。即ち皆さんが大きくなつて、家庭をもち、その家庭がほんとうに経済の條理に合つた生活をするといふやうなことになつてゆけば、自然に國の経済もよく動いて来る。こゝに初めて日本の兵力は充實し、富は増加し、國民總てが生活の安定を得るといふことになる。これは皆さん方の非常な責任で

あり、また教鞭をとられるお方にしても、この點はよほど考へてをらぬといかぬと思ふ。獨逸があゝの位えらい戦争をして、さうして年に十億、或は十億以上の賞金を出して今日までやつて來てゐるのは、やはり女子教育などの上に、経済といふことを非常によく吹込んで、この位合理的に、経済的にやつてゐる國民はない位なので、どうやらこうやらやつてゐるのである。若し獨逸の婦人が、日本でこの頃はやる、モダン・ガールのやうなものであつたら、とうに潰れてゐる。ところが、さすがは獨逸である。教育の仕方から日本などとはちがふ。先生の意氣もちがふ。學生も、殊に女子が非常に眞面目に、常に経済を考へて、ものを無駄にしない。無駄なことを一切しない。食べるものでも、極めて安い材料をもつて、うまく食べることを考へ、着るものでも、安いものをもつて、極く調子のよい、いかにも見たところよささうな着物をつくつて着るといふ工合に、上下心を一にしてやつてゐる。それだから、何とかして、あんな無理な

ことをせられても今日までやつて来てゐる。日本も、これからもつと強い國になり、富んだ國になつて、さうしてこの立派な皇室を戴いてゐる光輝を益々盛んならしむるには、何といつても女の方の力に俟たなければいけない。女の方の力により、経済といふことをよくやつて行かないと、到底大きな國家の経済といふものが立ないといふことになる。この點は、私は方々でいふのでありますが、特に注意していただきたい所であります。

昔は、経済といふと、何か算盤をはちく卑しいことのやうに考へてをつた。今でもさういふ風があるが、そんなものぢやない。ことに今日のやうに世界各國が鎬を削つてゐるといふやうな場合に、何としても、いくら兵力が強くとも経済力といふものが伴はなければいけない、これが根本は結局皆さんにある。皆さんの中、九十パーセントまでは必ず家庭をもたれる。それ等の方が、ほんとうに無駄をせず、経済の意義をよく會得してやつて行かれたならば、私は、

日本の前途といふものは、非常に有望なものであると思ふ。

畏し 大御心

最後に私の最も感じたことを申して、このお話を了らうと思ひます。曾て私が在職中に 今上陛下に、那須の御用邸に於て拜謁を賜つたことがあります。その當時私が参上いたして見ますと、まことに御質素であります。殊に午餐を賜つたその折に、テーブルの上に花が活けてある。何が活けてあるかといふと、時しも秋の頃、丁度野邊に咲いてゐる桔梗、刈萱、をみなへしといふやうなものが活けてある。これを拜して、洵に 陛下の大御心の御尊さに感激したのであります。普通花を活けるといへば、菊の花、チューリップ、アネモネといふやうなものをもつて来て活けなければ花のやうに思はぬ。然るに偶々、その邊にあるものを利用すれば却つて趣味がある。費用もかゝらぬ 陛下はちや

んとそれを御實行遊ばされてをります。私は實に感激しました。私の娘などは、この頃花の稽古をしてゐる。それに材料が非常にかゝる。なんでも珍らしい花を買つて、それを活けようとするのでありますから、材料がかゝるわけです。私の考では自然に咲いてゐる花草をとつて来て、これを活用する方が面白いと思ふ、庭に通草あけびがある。その通草を切つて来て、自分で花活にさす。私は花の活け方を習はないから、無茶苦茶ですよ。併しそれを床の間に置いて見ると、娘が、澤山の金をかけて、先生に教はつて来て活けたものよりは、私の方がよほどよいことがある。總てさういふものです。そこに自然の美、趣味、滋味、いろ／＼なものができて来る。娘等のは、たゞ外觀の美を趁うてやつてゐるものに過ぎぬ。教へる人もそれでやつてゐる。そんなことではいかぬ。それ等の點に留意して、よき校長先生、その他教員先生の御指導の下に、皆さんが精進して行かれることを心から切望する、かうなればこの精華女學校といふも

のは、益々繁榮をして、或はその名のあらはすが如くに、ほんとうに我が國の精華を發揮するやうな事になつて來ると私は考へまするので、喜びのあまり、私の方々歩いて來ました感想談を申し上げた次第であります。

昭和八年十一月十日印刷
昭和八年十一月十五日發行 (非賣品)

發行人 宮川はる子

印刷所 東京市豊島區堀之内町三番地
第一印刷株式會社

印刷人 小 埴 眞 造

發行所 東京市淀橋區角筈二丁目一〇一番地
精華高等女學校校友會

終